

2020 年 7 月 5 日（日）「賜物としての欲求」

《聖書協会共同訳》コヘレト 3:12-15

12 私は知った。一生の間、喜び、幸せを造り出す以外に、人の子らに幸せはない。

13 また、すべての人は食べ、飲み、あらゆる労苦の内に幸せを見いだす。これこそが神の賜物である。

14 私は知った。神が行うことは、すべてとしえに変わることがなく、加えることも除くこともできない。こうして、神は、人が神を畏れるようにされた。

15 今あることはすでにあった。これから起こることもすでにあった。神は過ぎ去ったものを捜し求める。

《新改訳 2017》伝道者の書 3:12-15

12 私は知った。人は生きている間に喜び楽しむほか、何も良いことがないのを。

13 また、人がみな食べたり飲んだりして、すべての労苦の中に幸せを見出すことも、神の賜物であることを。

14 私は、神がなさることはすべて、永遠に変わらないことを知った。それに何かをつけ加えることも、それから何かを取り去ることもできない。人が神の御前で恐れるようになるため、神はそうにされたのだ。

15 今あることは、すでにあったこと。これからあることも、すでにあったこと。追い求められてきたことを神はなおも求められる。

【序論】

昔の話ですが、ある人と「人間とは何か」と話し合っていたとき、その人が「人間とは欲だ」と答えていたのを思い出します。その人なりの人間観だったのだと思います。「欲」という言葉には「煩悩」を思わせるやや否定的なイメージが伴いますが、「欲求」と言い換えてみると「人間が生きるために本能的に具わっているもの」というやや肯定的なイメージになりそうです。

「欲」の分析については、仏教界の貢献にも耳を傾けるべきでしょう。「仏教では、眼・<sup>に</sup>耳・<sup>び</sup>鼻・<sup>ぜつ</sup>舌・<sup>しん</sup>身・<sup>い</sup>意の六根から欲を生ずるとする。」「仏教では、欲そのものは人間に本能的に具わっているものとして、諸悪の根源とは捉えないが、無欲を善として推奨し、修行や諸活動を通じて無欲に近づくことを求めており、自制ではなく欲からの解放を求めている。」（Wikipedia「欲」項より）

また、アブラハム・マズローによる「欲求階層論」も興味深く、彼は「人間は、ある欲求が満たされると、より高次の欲求を満たそうとする」と考えました。「人間の欲求は、『生理的欲求』『安全への欲求』『社会的欲求』『自我欲求』『自己実現欲求』の、低次元から高次元までの、5つの階層をなしている。」

## 【本論】

今日のコヘルトの言葉には、人間の「欲求」と関わる内容が含まれています。「飲食」「労働」という二つの次元の欲求が取り上げられている。飲食とは、生物が生命を維持するために必要な最も基本的な欲求、「呼吸」「食欲」「飲水」「排便・排尿」「睡眠欲」「性欲」の一つ（あるいは二つ）です。また、「労働」は、幅広い欲求と関連しており、「心理・社会的な欲求<sup>1</sup>」に属する高次の欲求に位置づけられるでしょう<sup>2</sup>。心理・社会

---

<sup>1</sup> 「ヒトは群居性<sup>ぐんきよせい</sup>の動物であり、また高度な思考力を持つために、社会的に認められたい、知識を満足させたい、他者を満足させたい、というより高次の欲求がある。」

<sup>2</sup> 「心理・社会的な欲求」の種類は多岐にわたる。Wikipediaでは28の欲求が挙げられている。

獲得：財物を得ようとする欲求。

保存：財物を収集し、修理し、補完する欲求。

秩序：整理整頓、系統化、片付けを行う欲求。

保持：財物を持ち続ける、貯蔵する、消費を最小化する欲求。

構成：組織化し、構築する欲求。

優越：優位に立つ欲求。達成と承認の合成。

達成：困難を効果的・効率的・速やかに成し遂げる欲求。

承認：賞賛されたい、尊敬を得たい、社会的に認められたい欲求。

顕示：自己演出・扇動を行う、はらはらさせる欲求。

保身：社会的な評判・自尊心を維持する欲求。

劣等感の回避：屈辱・嘲笑・非難を回避する欲求。

防衛：非難・軽視から自己を守る、また自己正当化を行う欲求。

反発：二度目の困難に対して再び努力し、克服・報復する欲求。

支配：他人を統率する欲求。

恭順：進んで他人（優越な人間）に積極的に従う欲求。

模倣：他人の行動やあり方を真似する欲求。

自律：他人の影響・支配に抵抗し、独立する欲求。

対立：他人と異なる行動・反対の行動をとる欲求。

攻撃：他人に対して軽視・嘲笑・傷害・攻撃する欲求。

屈従：罪悪の承服・自己卑下の欲求。

非難の回避：処罰・非難を恐れて法・規範に進んで従う欲求。

親和：他人と仲良くなる欲求。

拒絶：他人を差別・無視・排斥する欲求。

養護：他人を守り、助ける欲求。

救援：他人に同情を求め、依存する欲求。

遊戯：娯楽などで楽しみ、緊張を解す欲求。

求知：好奇心を満たす欲求。

解明：事柄を解釈・説明・講釈する欲求。

的な意味において、人間がどのような欲求を強く感じるかは、その人が育ってきた環境によって違って来るようです。一例として、病的なまでに人からの賞賛を求めるところには、幼少の頃に十分に満たされなかった認証欲求が息を潜めていることが多いと言われます。宗教の一つの役割は、人間のバランス感の欠けた部分に気づきを与え、それを修復（慰め）へと導いていくことであると思います。また、それらの人間の欲求に突き動かされて社会全体が回っているのであれば、そもそもその「欲求」というものを与えたのは誰であるかを考えさせるところにもあるでしょう。

#### 本論A. 人に与えられた賜物（12-13 節）

私は知った。一生の間、喜び、幸せを造り出す以外に、人の子らに幸せはない。また、すべての人は食べ、飲み、あらゆる労苦の内に幸せを見いだす。これこそが神の賜物である。（3:12-13）

今日の箇所には二度「**私は知った**」という表現が出てきます（12 節と 14 節）。この表現から感じ取れることは、コヘレトが「私はある事実気づいてしまったんだ」と、一つの悟り（諦めの境地）を強調していることです。その第一の内容が、12～13 節で言われていること。ところで、「**喜び、幸せを造り出す**」というふうに訳してしまいますと、何もないところから無理やり幸せを「創造する」感じがしますが、原文では2つの動詞「喜ぶ」（**הֵנִיחַ**／サマハ）と「楽しむ」（**הִשְׂמִיחַ**／アーサー）が並べられているだけです。むしろ、与えられた人生を喜び楽しむように勧められている、そんなイメージです。しかし、コヘレトの見方によると、この人生はあくまで受動的なものであり、「受けたものの中で人生を満喫しなさい」と「制限付き」の喜びが与えられているに過ぎないことになる。世界は回っている。どの時代にも延々と同じように動いている。その「時の流れ」を人間には止めることができない。一人の人の人生も限りあるものに過ぎない。それなら、その与えられた時間内で精一杯楽しめと。

そして、「喜び」と「幸せ」の具体的な内容として「飲食」と「労働」が取り上げられます。皆様は食べることが好きですか。嫌いな人はいないでしょう。神は人間が生存するために食欲をお与えになりました。この欲求がなくなることはなく、空腹感は繰り返し訪れます。そして、空腹感を覚えたところで口にするものの美味しさは、何物にも替え難い喜びをもたらす。このようにして、人間は食を楽しむことが許された人生を送っているのです。そして、ただ腹を満たせばよいという次元を超え、如何に食材を美味しく調理するか、味覚を満足させるかというところにまで進んでいます。この「食欲を満たす」という営みを神は人間に承認されました。

また、人間は労働を通して幅広い喜びを感じうる存在ともされています。いくつかのことを取り上げるならば、

- ・ 働くことで収入を得る喜び（獲得）
- ・ できなかったことができるようになったときの喜び（達成）
- ・ 物事を組織化し、構築する喜び（構成）
- ・ 人に認められる喜び（承認）
- ・ 家族を守る喜び（養護）
- ・ 物事の真理を解き明かす喜び（解明）

といった多岐にわたる喜びが労働には伴うでしょう。ここには、私たちが労働をどう捉えるかの問題があります。働くことはただしんどく苦痛な事柄なのか。それとも、そこに喜びを見出さうものなのか。コヘレトがこれらを「賜物」と呼んでいる点に注目したいと思います。ただ本能のままに生きている動植物とは違い、人間には文化を形成する能力が与えられている。言い換えるならば、地を管理する力（美と秩序をもたらす力）です。創造の記事に戻るならば、文化形成命令であります。

神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて、これに従わせよ。海の魚、空の鳥、地を這うあらゆる生き物を治めよ。」（創世記 1:28）

#### 本論B. 不変なる神の行為（14-15 節）

私は知った。神が行うことは、すべてとこしえに変わることがなく、加えることも除くこともできない。こうして、神は、人が神を畏れるようにされた。（3:14）

ここに今日二度目の「私は知った」が出てきます。コヘレトの悟りのもう一つの側面です。神の御業が不変であるということは、人がどう変えようとしても変わるものではないということを言い表しているでしょう。確かに、人間は多くのものを生み出し、文化を発展させてきました。しかし、それらはすべて「与えられた資源」の中で行なっているに過ぎず、むしろ発見されたものから「新しい」ものが作られていると言える。よって、「創造」は神の御業であり、「発見」が人間の業ということになるでしょう。人は何かを発見するときに、神の創造の御業が如何に奥深いかということを知る。人体の構造も、動植物の生態系も、深海の謎も、宇宙の先がどうなっているかも、未だ解明されていないことばかりです。

14 節の後半部分では、「こうして、神は、人が神を畏れるようにされた」と言われています。ここで用いられている「<sup>אָרַא</sup>／ヤーレー」という言葉には「恐れる」「崇める」「戦く」といった意味がありますが、コヘレトは自分を含めたすべての人間が有限であり、

神の御手の中で制限された人生を歩んでいる事実を認め、創造主を畏れ敬うよう勧めているのでしょう。

**今あることはすでにあつた。これから起こることもすでにあつた。神は過ぎ去ったものを探し求める。(3:15)**

本節前半の内容は、1:9-10 とほぼ同じです。新たに加えられた内容として、後半部分があります。この部分の翻訳は難しく、神が何を探し求めるのかが注解者たちの間でも意見が割れています。「יְבַקֵּשׁ אֶת־נִלְדָּרָאֵי (イエバケーシュ・エト・ニルダーフ)」を直訳すると、「(神は) 探し求める」「①迫害された者を ②追跡されたものを ③かつて探し求めたものを」となります。文脈で捉えると、「神はかつて探し求めてこられたものを探し求め続ける」となるでしょう (ラテン語訳はこの解釈を採用しています)。言い換えるならば、「神は過ぎ去ったことを何度でも繰り返す」ということになる。つまり、「**太陽の下に新しいものは何もない**」と。

さて、今日の箇所は二つのコヘレトの悟り (私は知った) によって構成されていました。諦めの境地に至ったコヘレトであり、神の支配下にある世界に生きる人間には、制限された喜びが与えられているという結論に至ったのです。それなら、その喜びを堪能せよと。一読者として真っ直ぐにこの箇所を読むと、嫌々ながら現実を受け入れていくコヘレトの態度が見えてきます。彼はここで一人二役を担っていると言えるでしょう。第三者的に現実を観察し、自分を含め人間とはある一定の枠から出ることのできない存在であることを語る。しかし、その一方で、そのような人生をお与えになった神を畏れ敬うことを勧める「伝道者」ともなるのです。

## 【結論】

私たちの人生とは、言われてみればその通り、まことに制限された「枠内」での出来事ではないでしょうか。しかし、一定の枠が与えられるということは、必ずしも悪いこととは言えません。むしろ、自分がなぜこの時代、この地、この環境に生まれたのかということを考えさせられます。私たちに与えられた一つ一つの人間関係にも何らかの意味があるでしょう。神が私の人生を通して、どのようなピースをご自身の美しいパズルにはめ込もうとしておられるのかを思い描いてみたいです。自分の人生がもし「制限されたもの」であるならば、そこには「制限を設けておられる方」の主権が認められるべきでしょう。神を畏れ敬い、礼拝し、私たちに与えられた様々な欲求を「賜物」として捉え、すべてのことを喜んで生きていきたいと思います。

**どんなことにも感謝しなさい。これこそ、キリスト・イエスにおいて神があなたがたに望ん**

でおられることです。( I テサロニケ 5:18)

【祈り】

人の人生に一定の枠を設け給うた神よ。私たちは、その小さな枠内で、必死に生きている存在です。全世界を駆け巡る人であったとしても、大宇宙から眺めれば、それは何と狭く、滑稽な姿でしょう。しかし、そのような人生の中に、あなたは大きい喜びを与えてくださいました。「食べる、飲む」という生理的欲求が絶えず満たされる喜びが与えられ、また「労働」を通して、何かを創作し、成長し、交流し、心が満たされる喜びをも与えてくださっています。これらは一時の、まことに小さな出来事かもしれませんが。しかし、神を知った私たちは、これらすべてを「賜物」として受け取ります。あなたが用意してくださった人生を満喫し、創造主なる神が誉め讃えられる一生を過ごすことができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

人に、生存に必要な欲求を与え、それを通して身体的歓びで満ち溢れさせ給う、父なる神の愛、

労働を軽んずることなく、それに伴う多くの心理的満足をもって、地を管理する役割に従事させ給う、主イエス・キリストの恵み、

与えられた欲求を、人の汚れた目的のためではなく、神の栄光のために用いさせ給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。